

シラバス（授業計画）目次

スタートアップ	――	1
複合芸術論	――	3
複合芸術応用論 A	――	6
複合芸術応用論 B	――	8
複合芸術応用論 C	――	10
複合芸術演習	――	12
複合芸術実習 I	――	14
複合芸術実習 II	――	16
複合芸術実習 III	――	18
制作技術実習 A 1	――	20
制作技術実習 A 2	――	21
制作技術実習 B 1	――	22
制作技術実習 B 2	――	23
制作技術実習 C 1	――	24
制作技術実習 C 2	――	25
制作技術実習 D 1	――	26
制作技術実習 D 2	――	27
制作技術実習 E 1	――	28
制作技術実習 E 2	――	29
特別研究 I	――	30
特別研究 II	――	32

授業科目名	スタートアップ	担当教員名	科目責任者：小田英之 飯倉宏治、石倉敏明、岩井成昭、今中隆介、尾登誠一、岸健太、志邨匠子、萩原健一、服部浩之、藤浩志
授業科目区分	導入科目		
履修区分	必修	授業形態	演習・実習（共同授業）
配当年次・学期	1年次前期	単位数	2単位
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>この授業は、大学院における研究の導入部分として、多様なバックグラウンドを持つ学生が大学院における「チーム」としての目的意識と共通言語を持ち、コラボレーションすることを基本とし、そのうえで、集中的にリサーチ、ディスカッション、プランニング、リソース管理、制作、プレゼンテーションを共同作業として実施する。また、大学院における研究や制作の基本的なプロセスの概観をテーマに、学生が「複合芸術」を理解するための「気づき」を得ることを目標とする。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>授業は、教員が設定したテーマとエリア（秋田市内）で、限られた時間の中でフィールドワークやリサーチを行い、達成可能な目標を定めアウトプット（＝成果）に落とし込むまでの一連のプロセスを、学生と教員との混成によるグループで経験する。グループごとに制作した作品（プロダクト、アートワーク、グラフィック、企画書、映像、論考など自由とする）は、作品の完成度よりも共同作業のプロセス内容を重視する。また、各グループに参加する教員は、プロセスの中で個々に必要なスキルの確認を行うと同時に、メンバーの相互理解、本学的环境・設備を把握できるように解説する。教員は、制作が円滑におこなえるよう各グループをサポートするファシリテーターとしての役割と、テーマ設定及び評価、運営担当者として作業を分担する。</p>			
<p>授業計画</p> <p>1日目</p> <p>第1-2回「ガイダンス1：導入・テーマについて・エリアガイド」（尾登誠一／小田英之）、 「解説1：調査・考察の方法論」（石倉敏明）、「ガイダンス2：グループ分け・機材環境説明」（萩原）</p> <p>第3-5回「解説2：フィールドワークの進め方」（岸健太）、「制作1」</p> <p>2日目</p> <p>第6-7回「解説3：グループワークの進め方」（今中隆介）、「制作2」</p> <p>第8-10回「制作3」</p> <p>3日目</p> <p>第11-12回「制作4」</p> <p>第13-15回「プレゼンテーション1：中間報告」（担当教員全員）、「制作5」</p> <p>4日目</p> <p>第16-20回「制作6」</p> <p>5日目</p> <p>第21-25回「制作7」</p> <p>6日目</p> <p>第26-27回「制作8」</p> <p>第28-30回「プレゼンテーション2：作品発表／講評」（担当教員全員）</p> <p>「制作1-8」は、ファシリテーター（飯倉宏治／萩原健一／服部浩之）の他、随時担当教員が対応する</p>			

※「制作」には、フィールドワーク／リサーチ／ディスカッション／プランニング／リソース管理／リアライズを含む。

履修上の注意

本授業は短期・集中的におこなうことに留意すること。

テキスト

教員が作成したテキストを適宜配布する。

参考書・参考資料等

必要に応じて適宜指示する。

学生に対する評価

授業への取り組み 40% プレゼンテーションおよび課題の成果 60%

授業科目名	複合芸術論	担当教員名	科目責任者：岩井成昭 飯倉宏治、尾登誠一、岸健太、 志邨匠子、服部浩之、藤浩志
授業科目区分	複合芸術科目		
履修区分	必修科目	授業形態	講義（オムニバス・共同）
配当年次・学期	1年次前期	単位数	2単位
授業の到達目標及びテーマ			
<p>本授業は、本専攻科における理念の要である「複合芸術」をさまざまな芸術領域から多様な視点を介して論じていくためにオムニバスで進行する。元来、芸術は自らの領域内における他分野との影響関係をはじめ、異文化相互の交流を背景に「複合」しながら進化し続けて来た。本授業では、これを「表現者個人の技術として習得される包括性」としての複合と、表現者個人が外部と連携・協働、或いはそれを誘導する役割を果たして実現する「社会的に生成・実践され積極的に超えられる専門領域」としての複合として捉える。この二つの概念の共存とバランス、そしてその複合機能を対象化するために、大きな社会変動の中で不随意に生成された歴史としての文化的複合のメカニズムを学びながら、現代社会における問題解決や新しい価値創造を目的として意識化された「複合芸術」を考察していく。</p> <p>また、本授業では、社会現象として捉えた「複合芸術」が機能するであろう五つのステージとして「地域性と文化的視点の複合」「複合的パートナーとのコラボレーション」「研究領域の複合」「スキル／方法論の複合」「表現を通じた未来像の複合」を設定し、アートやデザイン、批評といった芸術領域の役割や諸条件をそれぞれ五つの「ステージ」上に対応させながら理解させ、学生自らの研究領域を軸足にした「複合芸術」の構築を目指している。本授業で獲得された「複合芸術」の知識は、同期間に平行して開講される「複合芸術演習」によって実践され、学生の生きた経験として体得される。</p>			
授業の概要			
<p>本授業では初めに、複合芸術表現を探求・実践する上での論点を確認し、芸術史上で先行する複合表現として、ポストモダン、クレオール、ブルーリズム等を背景とした複合的な芸術思想や表現形態を紐解き、複合性が果たした役割とそのメカニズムを解説する。そして、特定地域でプロジェクトを企画し運営していくために有効な複合的な視点や、ソーシャルデザイン、ソーシャリー・エンゲージド・アート等、一つのメディアや技法に捕らわれないことを要因として、より現代的で複雑な課題に取り組んでいった表現を学ぶ。さらに、美術、プロダクトデザイン、情報デザイン、美術史・批評、それぞれの領域から「複合芸術」という概念が表現者の自己実現のみでなく、私たちが生きる社会の道標を形成するための適正技術になり得ることを知る。</p>			
授業計画			
<p>第1回「複合芸術とは何か1」（岩井成昭）</p> <p>20世紀初頭のシェーンベルクとカンディンスキーの邂逅を引合いに出すまでもなく、近代から現代において芸術が大きく転換する際に、さまざまな共振を伴う複合が認められる。その中には「社会思想、基底文化、作品の様式、素材、メディア、鑑賞者と参加者」など多くの論点を擁するが、これらは特に、異ジャンルの表現ながら同一のテーマを持つ作品同士を比較することで、本質的な表現の差異と複合のメカニズムが顕在化する。このような事例を紹介しながら複合の機能と意味を考えていく。</p>			

第2回「複合芸術とは何か2」(岩井成昭)

「複合」を方法論とすることで新たな価値創造を志向する現代表現として、2010年代における現代美術の重要な動向の一つ「ソーシャリー・エンゲージド・アート(社会関与型アート)」において、創造的行為を社会に関与させる際に起きる複合的な諸相を解説する。

第3回「機能デザイン」(尾登誠一)

他の造形行為に比較して守備範囲が広域であるデザインを社会的・経済的・産業的な側面のみならず文化・生活的価値創造やIT技術との関係など「複合的」な側面から考察する。

第4回「場所性とデザイン」(尾登誠一)

生物が適応していく条件としての環境の磁場を理解しながら、地域の場所性(ローカリティ)からどのような要素をデザインに活かすべきかを「複合的」な視点から解説する。

第5回～第7回「美術史の中で1～3」(志邨匠子)

1990年代、従来の伝統的な美術史学の方法論に、批評理論の視点が導入され、社会的な文脈のなかで視覚文化を捉える動きがはじまった。たとえば、ひとつの美術作品は、作者とパトロンとの関係、作品と鑑賞者との関係、描かれた対象と社会との関係など、多様で複合的な関係性のうえに成り立っている。この3回の講義では、このような事例をあげながら、美術史における多角的な作品論、作家論のあり方を考察する。まず西洋美術史学における批評理論の基礎的な考え方を概説し、そのうえで、日本美術史学への導入と制度論への発展、さらに現在の美術史研究の問題点を考える。

第8回「情報技術からアートへ1」(飯倉宏治)

情報技術により様々な情報を収集・処理・生成(出力)することが可能となる。ここでは、これらの情報や情報処理を空間的・時間的視点でとらえ、情報技術とアートとの関係について述べる。また、情報技術からアートへ、どのような関わり方が可能であるかについても考える。

第9回「情報技術からアートへ2」(飯倉宏治)

情報技術をアートへと適用する場合、様々な制作形態が存在する。特に技術者とのコラボレーション等においては、情報技術に対する素養の有無が重要な要素となる。ここでは、アーティストが情報技術を学ぶ意義やその意味について述べる。

第10回「都市空間の公共と私有」(岸健太)

都市社会環境において生成されるさまざまな「オーナーシップ(所有権)」の概念と「中間領域」を都市の複合性という視点から解説する。

第11回「都市空間の生態系」(岸健太)

労働移民の流入や都市市民の社会的な権利、固有の歴史やアイデンティティの喪失などの課題を孕む拡大する都市空間と、持続可能な都市社会のモデルとしての集落共同体を複眼的な視点で比較考察する。

第12回「アートマネジメントの構造」(服部浩之)

既存の表現を社会に問うだけではなく、社会へ関与する方法そのものを開発し表現とするアートの生成を例にとり、アートマネジメントの構造を解説していく。

第13回「キュレーションの領域」(服部浩之)

アートマネジメントの役割において特にキュレーションにフォーカスすることで、展覧会や文化事業が作り

だすメッセージを享受する対象としての鑑賞者の存在と、歴史を編纂するという学術的な影響力について考える。

第14回「アートイベント」(藤浩志)

純粹な芸術表現を展覧するだけでなく、さまざまな領域横断を経た社会的な意義や企てが複合的な集合体を形成しているのが現在のアートイベントである。アートイベントの機能が拡張している現状を幾つかの例をあげて解説する。

第15回「まとめ」(岩井成昭/志邨匠子)

社会生活における美術・デザインの位置付けがどのように変化して来たのかを「複合芸術」の視点から振り返りながらまとめを行う。

履修上の注意

配布資料のほか、適宜映像資料を使用します。なお、新しい研究成果を授業に反映させるため、各回の内容や順番を変更することがあります。

テキスト

教員が作成したテキスト適宜配布する。

参考書・参考資料等

D.A.ノーマン『複雑さと共に暮らす』、アンソニー・ダン『スペキュラティブ・デザイン』、永原康史『インフォグラフィックスの潮流』、アネミック.ファン.ブイエン他『デザイン思考の教科書』など。

学生に対する評価

授業への取り組み 30% レポート 70%

授業科目名	複合芸術応用論A	担当教員名	科目責任者：藤浩志 服部浩之
授業科目区分	複合芸術科目		
履修区分	選択必修	授業形態	講義（オムニバス・共同）
配当年次・学期	1年次後期	単位数	2単位
授業の到達目標及びテーマ			
<p>複合芸術としてのアートマネジメントを学ぶために、さまざまな文化・芸術活動がどのような動機からいかなる資金を得て、施設及び組織を運営し活動しているのかを知り、芸術が社会に存在しうるための仕組みを学ぶ。また、全国で実施されている特徴ある文化施設や芸術祭などを選び出し、複合芸術に対応するための運営という視点から、ケーススタディとして比較分析し、その目的や条件、環境などに合わせた幅広い企画、運営、評価の方法を理解する。</p>			
授業の概要			
<p>本授業では、はじめに社会における芸術の窓口とも言える文化施設や組織の運営形態、(美術館、ギャラリー、芸術祭、地域プロジェクト等)を実際の施設や事業における評価やデータを参考にして分析し、複合的な芸術表現やそのようなテーマで企画される展覧会などの文化事業について、各々の目的と運営形態の違いを学ぶ。次に、それぞれ実質的な運営に必要な企画・立案、資金調達・会計、運営管理、広報とアーカイブ、といった複合的な役割の意味とスキルを知る。こうして実際の運営現場で役立つための準備を万全に整えておく。</p>			
授業計画			
<p>第1回 複合としてのアートマネジメント（積極的に超えられる専門領域）（藤浩志、服部浩之）</p> <p>社会において魅力ある文化事業を実施するためには、多様な表現領域との連携に加えて、芸術外の専門領域やステークホルダーとの協働を要する。これらは問題解決や新しい価値創造を目指して積極的に複合していく過程そのものに他ならない。アートマネジメントを複合的な観点から解説し本授業の導入とする。</p>			
<p>第2回 文化施設（美術館、博物館、劇場）の機能と運営（服部浩之）</p> <p>ヨーロッパ型の美術館、博物館、劇場などが持ち込まれた明治時代以降、地域における公立の文化施設のありかたは変化し続けてきた。その歴史的背景から機能や運営形態がどのように変化してきたかについて分析し俯瞰する。</p>			
<p>第3回 交流施設（アートセンター、AIR、オルタナティブスペース）の機能と運営（服部浩之）</p> <p>主に完成された芸術作品の発表の場と位置づけされる美術館や劇場に対し、同時代の生の表現を作り出す場として1990年代に登場してきたアートセンターなどの交流施設についてその機能と運営を分析し、理解する。</p>			
<p>第4回 芸術祭（アートフェスティバル、映画祭、音楽祭）の機能と運営（服部浩之）</p> <p>施設の機能や組織に束縛されることなく地域という広い視野を持ち、文化政策としても位置付けられるようになった芸術祭という仕組みについてその時代背景と機能と運営を分析し研究する。</p>			
<p>第5回 文化イベント（フォーラム、シンポジウム、コンペティション、等）の機能と運営（藤浩志）</p> <p>文化施設、交流施設、芸術祭を問わず、あらゆるところで、そのありかたそのものを俯瞰し、新しいありかたを模索する上で開催される機会が広がってきた文化イベントのしくみについてその機能と運営を分析し研究する。</p>			
<p>第6回 アートプロジェクトⅠ（地域の環境・風俗・歴史・産業へのアプローチ）（藤浩志）</p> <p>場に対してどのようにアプローチするかが問われた1990年代から登場した、地域素材としての環境・風俗・歴史・産業などを基軸とするアートプロジェクトのしくみについて、その機能と運営を分析し研究する。</p>			
<p>第7回 アートプロジェクトⅡ（地域の課題と経済をめぐって）その機能と運営（藤浩志）</p> <p>2000年以降の経済破綻の影響を受け、地域において様々な課題に対する問題提起を行うようなアート</p>			

プロジェクトが登場する。そのしくみについてその機能と運営を分析・研究する。

第8回 事例分析Ⅰ：例「山口情報芸術センター[YCAM]」（服部浩之）

インターラボという研究機関を併設するなど特徴的な組織形態を有し、自然環境などと地域資源を組み合わせ多様な人の参加の場を生み出すなど、芸術文化機関としての先進的な取り組みを行う YCAM の事例を分析し考察する。

第9回 事例分析Ⅱ：例「ミュージアム・シティ・天神」（藤浩志）

1980年における川俣正の活動との関西における街中でのアートの展開を受けて、1990年に福岡の中心市街地の商業地区、天神エリアではじまったミュージアム・シティ・天神のその後の10年間の活動の変遷についてその歴史的背景を踏まえ分析する。

第10回 事例分析Ⅲ：例「アート・トリエンナーレ」（服部浩之）

各地で行われるアート・トリエンナーレの各事例を比較し、その変遷と課題、効果を比較・分析する。

第11回 運営の実践Ⅰ：目的意識・組織形成から企画・立案・計画表（藤浩志）

実際にアートプロジェクトを立ち上げる際に最も重視すべき要項について、実践を行うために初期段階に問題となる目的意識と組織形成について議論し実践の実際を学ぶとともに、アートプロジェクトを構築する柱となる企画の立案と計画表の作成について検討し実践手法を研究する。

第12回 運営の実践Ⅱ：ファンドレイジングと会計（藤浩志）

アートプロジェクトの実践に欠かせないさまざまなファンドレイジングと会計についてさまざまに検討し構築手法の実際を学ぶ。

第13回 運営の実践Ⅲ：記録とアーカイヴ（服部浩之）

アートプロジェクトをどのように位置付け、存在させるために行うべき記録やアーカイヴのありかたについて検討し、効果的な手法を研究する。

第14回 運営の実践Ⅳ：フィードバックと評価基準の設定（服部浩之）

アートプロジェクトが地域社会にどのように存在し、どのような連鎖を生みだし、どのように評価されたのかについて、活動のフィードバックや評価基準を設定し実践の手法を研究する。

第15回 まとめ（服部浩之、藤浩志）

さまざまな複合的な芸術表現がどのように実践され、その中で「複合芸術」としてのアートマネジメントがどのように存在するのか、そのあり方についてのまとめを行うとともに新しい実践へと向かう。

履修上の注意

テキスト

教員が作成したテキストを適宜配布する。

参考書・参考資料等

Nicolas Bourriaud 『Relational Aesthetics』、クレア・ビショップ 『敵対と関係性の美学』、藤田直哉 『地域アート——美学/制度/日本』、ケネス・フランプトン 『批判的地域主義に向けて』、ギー・ドゥボール 『スペクタクルの社会』、ユルゲン・ハーバーマス 『公共性の構造転換』などの他、授業で適宜紹介する。

学生に対する評価

授業への取り組み 30% レポート 70%

授業科目名	複合芸術応用論 B	担当教員名	科目責任者：尾登誠一 飯倉宏治、萩原健一、小田英之、 永原康史
授業科目区分	複合芸術科目		
履修区分	選択必修	授業形態	講義 (オムニバス・共同)
配当年次・学期	1年次後期	単位数	2単位
授業の到達目標及びテーマ			
<p>授業では、デザインをベースに社会（地域）の様々な問題に対して複合的に解決や提案を試みるための手掛かりとして、デザイン手法（グラフィックデザイン、プロダクトデザイン、情報デザインなど）とその考え方について社会的手法を抽出し理解を深める。また、シンギュラリティの到来もささやかれる昨今、さらに高度化する情報社会を見据えて、関連するテクノロジー（情報）や映像手法を交えた複合的な視点に立ち、デザインや美術、テクノロジー、社会、思想といった様々な要素がレイヤー化されるソーシャルデザインとその実践の新たな地平を展望する。</p>			
授業の概要			
<p>授業でははじめに、デザインにおける複合的な試みを事例に、複合的なデザインの思考・方法論をプロダクトデザイン及びビジュアルコミュニケーションの視点から紐解いていく。加えて、人工知能と発展する情報技術の先進的な知識を紹介。同様に、現代社会における映像技術の発展とその役割について解説する。さらに、それらの理解を基にしたソーシャルデザインの実践に向けて、より広く社会の問題解決に繋げる可能性を提示していくほか、それらの活動を具体化する選択肢としての起業及び法人設立などの実践的な方法論等を5人の教員によるオムニバス・共同形式の講義として行う。</p>			
授業計画			
第1回	<p>「導入」デザインにおける複合とは何か（尾登誠一）</p> <p>デザインが果たしてきた社会的役割についてプロダクトデザイン、グラフィックデザインなどの事例を紐解きながら、ソーシャルデザインをはじめとする、より複合的なデザインの適用について考察し、デザインの複合性を俯瞰する。</p>		
第2回～3回	<p>「デザイン1」プロダクトデザインの立場から（尾登誠一）</p> <p>「デザインは世界が抱える問題を解決できるのか」という問いをトピックに、デザインを複合的視点から「場所性」すなわち人間を含む生物が環境に適応していく条件として捉え、紐解いていく。</p>		
第4回～5回	<p>「デザイン2」ビジュアルデザインの視点（永原康史）</p> <p>グラフィックデザインやインフォメーションデザインが世界に答えてきたこと、その思想を踏まえソーシャルデザインとしての方向性や方法論を示す。</p>		
第6回～8回	<p>「テクノロジー」（飯倉宏治）</p> <p>「テクノロジーと引き返せない楔」「技術からみた、やがて訪れる未来」「新しい技術とのつきあい方」をトピックとし、私たち個々人の感覚を例に技術の進歩や発展の方向性について論じる。また、技術革新がもたらす質的变化とその法則を紹介し、美術・デザインを視野に入れた複合的な新技術の習得方法について具体的な解説を行う。</p>		
第9回～11回	<p>「スモールオフィス・ベンチャー・NPO」（飯倉宏治）</p>		

<p>「起業を考えたときに知っておくべき事柄について」「事業にまつわる各種の事務処理について」などをトピックに進める。実際に事業を営む場合に活動の拠点の他、さまざまな事務処理が発生する。商習慣に関連する書類はもとより、税に関する事務処理についても解説を行う。</p> <p>第12回～14回「写真・映像技術の進化」(萩原健一／小田英之)</p> <p>急速に進化する写真／映像の撮影・編集環境の中で、社会とどう関わることができるのか、写真は人をどう変えたかを、変容する映像・壊れる映像等に関する作例を通じてその技術と可能性について論じる。</p> <p>第15回「まとめ(複合するデザイン・テクノロジー・メディアの視点)」(小田英之／尾登誠一／飯倉宏治)</p> <p>デザイン・情報技術・映像メディアといった異なる領域を複合的な視点で捉え直し、世界とどう関わることが出来るのか、何を成すべきか問うと同時に、目指すべき方向と可能性について示す。</p>
<p>履修上の注意</p> <p>配布資料のほか、適宜映像資料を使用します。なお、新しい研究成果を授業に反映させるため、各回の内容や順番を変更することがあります。</p>
<p>テキスト</p> <p>教員が作成したテキスト適宜配布する。</p>
<p>参考書・参考資料等</p> <p>D.A.ノーマン『複雑さと共に暮らす』、アンソニー・ダン『スペキュラティブ・デザイン』、永原康史『インフォグラフィックスの潮流』、アネミック.ファン.ブイエン他『デザイン思考の教科書』などの他、授業で適宜紹介する。</p>
<p>学生に対する評価</p> <p>授業への取り組み 30% レポート 70%</p>

授業科目名	複合芸術応用論 C	担当教員名	科目責任者：志邨匠子 石倉敏明
授業科目区分	複合芸術科目		
履修区分	選択必修	授業形態	講義（オムニバス・共同）
配当年次・学期	1年次前期	単位数	2単位
授業の到達目標及びテーマ			
<p>21世紀の美術・工芸・デザインは、自然と文化（人工物）が密接に絡み合った同時代の現実に晒され、異質な価値観の交錯の中から新たな創造的活動（複合芸術）を生み出し続けている。本講義では美術史研究の方法と芸術人類学の方法を組み合わせることによって、いわば「美術」という制度の内側と外側からこうした創造性の来歴を問うものである。過去・現在・未来の時間軸を往還しつつ、人間性の境界を越えて人々に大きな影響を与える「重要な他者性（significant otherness）」についての理解を深めることによって、人間中心主義を超えて生成する複合芸術の表現可能性を探究する。</p>			
授業の概要			
<p>本授業ではこれまで超域的な芸術活動を支え、活発な応答をおこなってきたさまざまな思想を検討し、受講者自身が独自のテキスト実践を通して「言葉による複合芸術」に参画することを目指す。受講者は各回の主題に応じた「他者論」のテキストを精読し、さらにその内容を踏まえたレポートや創作表現等を書くことによって、イメージ次元と呼応関係にあるようなテキスト生産の方法を獲得することが求められる。検討するテキストは美術史、芸術学、人類学、哲学、宗教学等の諸領域から適宜選択する。</p>			
授業計画			
<p>第1回 「複合芸術の視野をひらく」（志邨匠子、石倉敏明）</p> <p>現在、我々が直面する「デジタル時代の他者性」「異なる超越性の調停」「人間的なるものを越えた他者性」等の問題は、いったい何を意味するのか。一連の講義の前提となる「複合芸術」という概念を明らかにした上で、様々な技術や知を横断する芸術活動のあり方について詳述する。</p>			
<p>第2回～3回 「戦争と平和」（志邨匠子）</p> <p>主に絵画・映像の領域において、「敵」がいかに表象されてきたのかを概観し、特に太平洋戦争期の事例を取り上げ考察する。また、占領下の美術を文化帝国主義と文化ヘゲモニーの観点から考察する。</p>			
<p>第4回～5回 「異人と怪物」（石倉敏明）</p> <p>文化的な共同体の外部にある他者を「異人」や「怪物」としてイメージ化してきた事例を取り上げ、その背後にある神話的な論理を考察する。また、人間性の臨界に現れるそのような「他者」のイメージが持つ歴史性や政治性について考察する。</p>			
<p>第6回～7回 「性と自然」（志邨匠子）</p> <p>美術史におけるヌードと肉体表象を通して、性愛や欲望のコードがどのように視覚化されてきたのかという問題を、西洋美術、日本美術の両方の事例をあげ、多角的に考察する。またジェンダーやフェミニズムの観点から、性と自然について考察を加える。</p>			
<p>第8回～9回 「贈与の神話学」（石倉敏明）</p> <p>男性／女性の対立を自然／文化の関係のアナロジーとして理解する民族誌学の例を通して、女性の出産＝生殖能力を生態系における自然の生産力（「純粹贈与」の力）と結びつけてきた神話的な思考の広がりについて考察する。</p>			

第10回～11回「異境と出会う芸術」(志邨匠子)

岩村透から岡本太郎まで、異国の文化と出会った日本の批評家や画家たちの体験が、いかに新たなイメージ生産に結びついていったかという事例を考察する。また19-20世紀、万国博覧会で展示された美術作品を事例に、異国における美術受容のあり方を考察する。

第12回～13回「ハイブリッド芸術論」(石倉敏明)

植民地主義の時代における先住民と西欧人の文化接触について考察した人類学者レヴィ=ストロースの研究を端緒として、文化相対主義を超えて展開する現代人類学の他者論を概観し、異文化の混淆の渦中で生成するハイブリッドな表現の可能性を考察する。

第14回「宗教と超越性」(志邨匠子)

民衆的な神仏習合思想を廃棄し、神仏分離・廃仏毀釈へと進んだ明治以後の日本の宗教政策と美術表現の関係を通して、宗教的な次元において表現されていた超越性が芸術的な範疇にいかにか翻案されてきたかを概観する。

第15回「偶像化を超えて」(石倉敏明)

超越性と偶像性をめぐるイメージ人類学の事例を通して、知覚不能なものを知覚可能なものに(あるいはその逆に)変容させる技術としての芸術実践について探究する。

履修上の注意

各回の内容や順番を変更することがあります。

テキスト

各回のテキストは適宜配布します。

参考書・参考資料等

J. ダワー『人種偏見』、L・ニード『ヌードの反美学』、E.サイード『オリエンタリズム』、C.レヴィ=ストロース『野生の思考』、B.ラトゥール『「虚構」の近代』、A.ジェル『芸術とエージェンシー』などの他、授業で適宜紹介する。

学生に対する評価

授業内の課題 40% レポート 60%

授業科目名	複合芸術演習	担当教員名	科目責任者：小田英之 岩井成昭 今中隆介、尾登誠一、岸健太、飯倉宏治、藤浩志、志邨匠子、服部浩之、萩原健一
授業科目区分	複合芸術演習科目		
履修区分	必修	授業形態	演習（オムニバス・共同）
配当年次・学期	1年次前期	単位数	8単位
授業の到達目標及びテーマ 複雑に変化する社会の流れに対応しうるスキルの習得は、複合芸術を研究・制作するうえでの基盤といえる。修士課程は、最終的に自身が選択する専門性を軸に、さまざまな領域横断的な関係性を検証し、拡張と交換という展開性を必然付ける。授業は、現代芸術／デザイン／情報技術／アートマネジメント／アトライティングなどを構成する要素を複合的に組み合わせた芸術諸分野の研究や、作品制作に不可欠な汎用性・応用性の高い知識とスキルを演習の中で集中的に学び複合芸術を俯瞰することを目標とする。授業では、社会や環境、或いは芸術それ自体から発露する表現の根拠を見出し、各自が自己表現しつつその成果を分析し持続・発展させることを指向させ、複合的領域横断から生まれる新領域創造への可能性を概観することをテーマとしている。			
授業の概要 この授業は、社会に対応しうる実践的かつ、芸術における幅広い視野を持ちながら特別研究に導入していくためのさまざまな芸術領域から抽出したスキルを集中的かつ複合的に学ぶ演習である。とりわけ以下4つの手法に関するスキルを得ることを奨励する；1「調査研究手法」として地域と場所性を調査し関係性を構築するスキル。2「表現技術手法」として、クリエイティブなアイデアを具体的なメディアを通して具現化させるスキル、3「成果発信手法」として、情報の発信・受信機能を理解しながら活用するスキル。4「企画具体化手法」として、社会に向けた有効性を検証するためのワークショップを開発するスキル。これらの習得を目標として、1～2週間単位の全10に及ぶ技術演習を連続して実施する。それぞれの演習は専門技術ごとの教員が単独または複数で担当し、学生はその演習構成の特徴に合わせて、共同または個人で与えられた共通テーマに取り組む。中でも「地域研究」「メディア・リテラシー」「ワークショップ開発Ⅰ」「ワークショップ開発Ⅱ」等では、受講者の共同作業が予定されているが、これらの演習プロセスにおいて、学生が企画運営者、表現者、研究者などそれぞれ別の立場から課題にあたることから、表現の諸相、複数の社会的座標における経験の共有も目論まれている。			
授業計画 第1回～6回 「 地域プロジェクト批評 」（服部浩之／藤浩志） 国内における地域プロジェクトの概要紹介の後、履修生は既存の特定地域プロジェクトを一つ選択し、それぞれのテーマで分析し、ディスカッションで理解を深める。「複合芸術応用A」（後期）に向けた導入的な演習であり、相互に学習効果を上げるプログラムを形成している。 第7回～12回 「 地域研究 」（岸健太／岩井成昭） 初めに地域研究の手法の違いを理解するために、アートの手法、建築的手法、社会学及び文化人類的な手法がアート及びデザインにどのように活かされているかを理解する。次に履修生は特定のテーマを探し出し、任意の地域においてフィールドワークを行い、それぞれの調査結果と自身のテーマに基付き同地域とどのような関係を築けるのかをまとめ、プレゼンテーションする。 第13回～16回 「 メディア・リテラシー 」（萩原健一） 映像を撮る、撮られる、編集する、そして視聴者として観る、解釈するなど、さまざまな映像制作の過程を辿りながら、実験によってリテラシー能力を高める。同時に、映像制作やプロモーション映像、アートマネジメント領域におけるアーカイブ制作などさまざまな映像制作に必要な知識を得る。			

第 17 回～20 回 「総合デザイン」(尾登誠一／今中隆介)

自然と人工物、生活デザイン、インブループメントという価値基準、機能研究をベースにデザインの意味を多角的に知るワークショップ。「複合芸術実習Ⅱ」におけるソーシャルデザインの多様性をこの演習で理解しておく。

第 21 回～24 回 「インフォグラフィックス」(小田英之)

アイデアやイメージ、あるいは様々な社会現象や事象などの「情報」を「視覚化(=ビジュアライズ)」することによってより深い理解を促し、効果的に社会に伝達していく方法を演習の中から探る。

第 25 回～28 回 「メディア表現・電子工作」(飯倉宏治)

インタラクティブな作品を情報システムとして理解する力を養う演習として「構成要素への分解とデータパイプライン」「情報処理装置(ソフトウェア)試作」「情報処理装置(ハードウェア)試作」「システムとしての再構成」を毎回のテーマとして実施する。

第 29 回～36 回 「プロトタイピングメソッド」(飯倉宏治／今中隆介／尾登誠一)

さまざまな発想をデジタル・プロトタイピングとして 3D プリンター等を使用し実体化することを検証する。工芸とプロダクト、アートとの領域横断的な思考や商品開発など多様な展開を前提に実習を行うことで、構想の広がりを目指す。

第 37 回～44 回 「言語表現・アトライティング」(志邨匠子／服部浩之)

作品や展覧会をはじめ、発想や事象の記述方法、理論の組立、リファレンス、批評などテキストを使った実践を行う。「複合芸術応用論 C」履修者、及び「特別研究」において論文による研究を選択する者だけでなく、「複合芸術実習Ⅰ、Ⅱ」における企画意図や評価報告などにも応用できる執筆・構成・編集の演習を行う。

第 45 回～52 回 「ワークショップ開発Ⅰ」(岸健太／萩原健一／岩井成昭)

国内におけるアート・ワークショップの成立過程を踏まえながら、表現の領域横断や拡張、表現者自身のスキルアップを目的においた実験的ワークショップの考案および実践方法の開発。「複合芸術実習Ⅰ、Ⅲ」のプロセスやリサーチの手法としても組み込むことができる汎用性の高いワークショップの技術を演習によって学ぶ。

第 53～60 回 「ワークショップ開発Ⅱ」(尾登誠一／藤浩志)

ソーシャルデザインの現場や、ソーシャリー・エンゲイジド・アートにおける社会的なニーズに応答するアウトリーチ型ワークショップの考案および実践方法の開発。「複合芸術実習Ⅱ、Ⅲ」のプロセスやリサーチの手法としても組み込める汎用性の高いワークショップの技術を演習によって学ぶ。

(4 コマ／週×15 週)

履修上の注意

材料費等実費を徴収することがある。

テキスト

必要なテキストは適宜配布。

参考書・参考資料等

授業で適宜紹介する。

学生に対する評価

プロジェクトの妥当性、作品や調査の成果およびそれぞれのプロセスにおける取り組みなど、各技術演習の担当教員による評価を集計し総合的に評価する。

授業科目名	複合芸術実習 I	担当教員名	科目責任者：藤浩志 服部浩之、岸健太
授業科目区分	複合芸術実習科目		
履修区分	必修	授業形態	実習 共同
配当年次・学期	1年次後期	単位数	2単位
授業の到達目標及びテーマ			
<p>「複合芸術演習」で学んだ領域横断から生まれる未知の芸術への可能性、表現の社会的自立と環境を分析する能力の複合的獲得を目指して、実際に学外に出向き公共機関や企業、市民等を対象とするアウトリーチ型プロジェクトを実施する。本実習では特に現代美術から派生しているソーシャリー・エンゲージド・アート（社会関与型芸術）の手法を活用し、既存の地域団体または民間企業との柔軟性のある協働を試みる。本演習における企画立案から民間企業等への提案と交渉は、事前に連携交渉を行った自治体及び協力企業とのコラボレーションが原則となる。</p>			
授業の概要			
<p>本実習は複合的な芸術表現を通して地域社会と関わるためのコラボレーション、アウトリーチの実習として、「複合芸術実習Ⅱ」と共に短期的なプロジェクトとして完結させ、次に続く長期にわたり独立性の高い「複合芸術実習Ⅲ」への準備段階として位置づけられる。本実習はグループワークを基本とし、これをプロジェクトの運営組織と規定する。学生は予め教員が交渉した自治体や民間企業の文化事業の枠組を活用し、その中でお互いの動機の共有に始まり、プロジェクトを構想、実施、評価・検証するために必要なさまざまなステップを踏む。また、全体の運営プロセスを理解したうえで自身の方向性を生かしながら分業を受け入れることで、事業プロセスにおける役割分担と共有方法、作業現場における諸機能を学習する。なお、本授業と連携する組織とのコラボレーション例として、秋田市が計画するアート事業等とのリンクが想定されている。</p>			
授業計画			
第1回～6回	<p>「フィールドワークとリサーチ」サーベィの手法を応用して地域社会を調査する。プロジェクト運営に必要な組織形態を検討し構築する。</p>		
第7回～12回	<p>「動機の共有とテーマ設定／組織図の制作」調査結果を踏まえてプロジェクトのテーマ設定と企画立案を行う。コラボレーションする学外組織を選定し交渉をまとめる。運営資金の算出と調達の計画等。</p>		
第13回～18回	<p>「プロジェクト運営1」設定されたテーマを踏まえ、作品制作・イベント、ワークショップなど任意のメディアと形式による活動を実施するとともに、最終的なアウトカムを踏まえた記録や広報などの手法についても計画・検討する。</p>		
第19回～27回	<p>「プロジェクト運営2／中間報告」プロジェクトの進捗状況を履修生と指導教員、連携企業担当者等と確認し合いながら、必要な軌道修正や追加措置を行なう。</p>		
第28回～33回	<p>「プロジェクト運営3」運営段階の推移によってそれぞれ行なうべき広報や記録の進行を確認しつつメインのプロジェクトを実施、完了させる。</p>		
第34回～36回	<p>「プレゼンテーションと内部評価」プロジェクトの全容を学内と連携外部組織双方にてプレゼンテーションを行なう。プロジェクトがどのようなプロセスを経てどのような結果を導いたのか、関係者以外にも適切に報告し、内部的な評価を集める。</p>		
第37回～39回	<p>「フィードバックと外部評価」プロジェクトの成果を踏まえ、テーマ的には芸術的な視点と社会的な視点から、実践としては外部の視点から意義の検証・評価を行なう。</p>		
第40回～45回	<p>「アーカイブの作成」プロジェクトのプロセスと成果を踏まえて、グループ及び役割分担がある運営組織の中で、個人としてどれだけ機能していたかを検証できるようなアーカイブを作成し、今後の持続的活動に生かす。</p>		
<p>藤浩志（アートマネジメント分野）、岸健太（コミュニティーデザイン分野）、服部浩之（アートマネジメント分野）の共同授業</p>			

履修上の注意
テキスト 教員が作成したテキストを適宜配布する。
参考書・参考資料等 パブロ・エルゲラ著『ソーシャリー・エンゲージド・アート入門』、その他、授業内で適宜紹介する。
学生に対する評価 授業（プロジェクト）への取り組み 40% 課題の成果 60%

授業科目名	複合芸術実習Ⅱ	担当教員名	科目責任者：今中隆介、尾登誠一、飯倉宏治、小田英之、萩原健一
授業科目区分	複合芸術実習科目		
履修区分	必修	授業形態	実習 共同
配当年次・学期	1年次後期	単位数	2単位
授業の到達目標及びテーマ 授業は、複合芸術演習で習得したスキル及び領域横断から生まれる新領域創造の可能性と、複合芸術実習Ⅰで体験した表現の社会的自立に必要なマネジメント感覚、また地域から学ぶフィールドワークやその分析能力を踏まえて、自らのスキルを社会に向けてさらに応用展開するデザイン力を養うことを目標とする。また、学外組織との連携実践を7週間設定し、デザイン（プロダクト・環境・情報・ビジュアルなど）によって身近な社会問題の解決を試みるプロジェクトとして、「ソーシャル・デザイン」による社会デザイン能力の拡張と交換をテーマに、具体的な制作・提案を行う。その際、ファブリケーションやIT、映像など、多様なスキルやメディアを複合的、効果的に使用することを試みる。			
授業の概要 本演習はグループワークが基本であり、これをプロジェクトの運営組織と考える。履修生はお互いの動機の共有に始まり、実際にプロジェクトを構想、実施、評価・検証するために必要なさまざまなステップを踏む。また、全体の運営プロセスを理解したうえで自身の方向性を生かしながら分業を受け入れることで、事業プロセスにおける役割分担と共有方法、現場におけるデザインの諸機能を学習する。			
授業計画 第1回～6回 「デザイン」デザインのリサーチ方法により地域社会をテーマとしたプロジェクト案を作成する。実習Ⅰでの成果を踏まえ、ソーシャルデザイン、プロジェクト運営に必要な組織形態を検討し構築する。 第7回～12回 「動機の共有とテーマ設定／組織図の制作」調査結果を踏まえて、プロジェクトのテーマ設定と企画立案を行う。必要があればコラボレーションする学外組織を選定し交渉をまとめる。運営資金の算出と調達の計画等も含む。 第13回～18回 「プロジェクト運営1」設定されたテーマを踏まえ、提案型の作品やプロダクト制作（プロトタイプ）、ワークショップなど任意のメディア形式による制作・活動を実施するとともに、最終的なアウトプットを踏まえた記録や広報などの手法についても計画・検討する。 第19回～27回 「プロジェクト運営2／中間報告」プロジェクトの進捗状況を履修生と指導教員、外部関係者等全員で確認し合いながら、必要な軌道修正や追加処置を行なう。 第28回～33回 「プロジェクト運営3」運営段階の推移によってそれぞれ行なうべき広報や記録の進行を確認しつつメインのプロジェクトを実施、完了させる。 第34回～36回 「プレゼンテーションと内部評価」プロジェクトの全容を学内と連携外部組織双方にてプレゼンテーションをする。プロジェクトがどのようなプロセスを経てどのような結果を導いたのか、関係者に報告し、内部的な評価を集める。 第37回～39回 「フィードバックと外部評価」プロジェクトの結果を踏まえ、テーマ的には芸術的、社会的な視点、実践としては組織内部及び外部からの視点、それぞれから成果の意義に関する検証・評価を行う。 第40回～45回 「アーカイブの作成」プロジェクトのプロセスと成果を踏まえて、グループ及び役割分担がある運営組織の中で、個人としてどれだけ機能していたかを検証できるようなアーカイブを作成し、今後の活動に生かす。			

尾登誠一（ソーシャルデザイン分野）、今中隆介（プロダクトデザイン分野）、飯倉宏治（情報技術分野）、小田英之（美術分野）、萩原健一（映像分野）の共同授業

履修上の注意

テキスト

教員が作成したテキストを適宜配布する。

参考書・参考資料等

村田智明『ソーシャルデザインの教科書』、寛裕介『人口減少×デザイン』、ジュリア・カセム（著，編集），平井康之（著，編集）他『インクルーシブデザイン:社会の課題を解決する参加型デザイン』などの他、授業で適宜紹介する。

学生に対する評価

授業への取り組み 40% プロジェクトでの役割および成果 60%

授業科目名	複合芸術実習Ⅲ	担当教員名	科目責任者：岩井成昭 尾登誠一、今中隆介、岸健太、飯倉宏治、 志邨匠子、服部浩之、小田英之、萩原健 一、藤浩志
授業科目区分	複合芸術実習科目		
履修区分	必修	授業形態	実習 共同
配当年次・学期	2年次前期	単位数	2単位
授業の到達目標及びテーマ <p>1年次の「複合芸術演習」を踏まえて「複合芸術実習Ⅰ」ではソーシャリー・エンゲージド・アート（社会関与型芸術）等「現代芸術」の手法を軸に、また「複合芸術実習Ⅱ」では「ソーシャルデザイン」の観点から学外でプロジェクトを実施してきたが、2年次における本実習ではそれらの実習の成果分析とそこから得た知見をさらに展開させて、個人、またはグループでテーマを設定し、特別研究を経て修了制作・修士論文につながる独自性の高い調査や研究プロジェクトを実施し、複合芸術の創造性と可能性を最終確認、自覚することを目標とする。なお、この活動は地域社会や地方自治体、提携民間企業など学外を対象に社会的な実践として行われる。</p>			
授業の概要 <p>グループ、または個人による実践である。「複合芸術実習Ⅰ」及び「複合芸術実習Ⅱ」における実践を踏まえることが原則だが、以下三種の系統いずれかを前提にそれぞれの学生が自身の研究計画によって独自のテーマ性と社会性を適切に担保してテーマを設定する。実習の外部パートナー（行政組織／民間企業／非営利団体／市民団体／教育施設／等）については、学生自らがテーマに適応した組織や企業を選出し、企画提案・交渉を行うことが課せられる。ただし、民間企業とのコラボレーションに関しては、外部企業による本学への支援組織「アキビネット」等を通しての選定依頼が可能である。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) [現代芸術系]：地域課題応答型プロジェクトの実施及び運営、地域リサーチ型の作品制作と展覧会の実施、ローカルメディアとの共同制作、社会介入作品や、アーティスト・イン・レジデンスへの参加や運営、ワークショップの企画や実施等。 2) [ソーシャルデザイン系]：地域企業やローカルメディアとのコラボレーション、企画提案、商品開発、空間創造、空間演出、既存のネットワークや情報へのデザイン提案、イベントの企画・実施、等 3) [研究系]：同実習Ⅰ及びⅡで展開されたプロジェクト、或いはⅢで展開されるプロジェクトによる作品の批評。実施されたイベントや発表、プレゼンテーションに対する情報紙、カタログ、記録集の編集、執筆。関連テーマによる文献研究及び論文、テキストによるアートプロジェクト、等。 <p>上記の想定される三系統について、プロジェクトはグループ及び個人研究、いずれにも十分な成果を得られる必要がある。また、研究テーマが必ずしも「社会的」である必要はないが、調査のプロセスや成果発表の機会を地域社会との「アクセスポイント」として機能させることが本実習の特色である。この場合の「アクセスポイント」とは、専門性の内側に閉鎖せず、一般市民がそれぞれの研究プロセス及び成果に触れることができるオープンなプレゼンテーションの「仕組み」を指す。本実習を起点とし、修了後にも持続可能な地域活動を計画する場合、一般社団法人、特定非営利活動法人等の組織立ち上げも視野に入れる。</p>			

授業計画

第 1回～ 6回 「複合芸術実習 I, II」の成果分析・課題共有を経て実習テーマの設定、企画構想。

[現代芸術系]、[ソーシャルデザイン系]においては、プロジェクトの実施対象、または協働者としてのステークホルダー、カウンターパートの確保を行なう。[研究系]においては、同授業内で着手される。プロジェクト運営等に加わりながらテーマを定めるか、自身の調査計画表案を担当教員と相談の上完成させる。

第 7回～12回 グループまたは個人による企画案のプレゼンテーションと全員参加のディスカッション

第 13回～18回 [現代芸術系]、[ソーシャルデザイン系]においては、プロジェクト及び作品制作の実施計画書・広報資料等の作成。[研究系]における論文制作等の研究計画書及び調査計画書の作成。それらの最終的なプレゼンテーションを全員で実施。

第 19回～24回 事業(プロジェクト/制作/調査)実施

プロジェクトの形態に「アクセスポイント」の実現が十分に考慮されているかを検証する。

第 26回～30回 事業(プロジェクト/制作/調査)実施<学内進捗報告1>

第 31回～36回 事業(プロジェクト/制作/調査)実施

第 37回～39回 事業(プロジェクト/制作/調査)実施<学内進捗報告2>

第 40回～42回 事業(プロジェクト/制作/調査)実施 それぞれの「アクセスポイント」が機能しているかを検証する。

第 43回～45回 実施報告と全体評価(修了作品、修士論文への連結を中心に報告する)

尾登誠一(ソーシャルデザイン分野)、今中隆介(プロダクトデザイン分野)、岩井成昭(美術分野)、岸健太(ソーシャル/コミュニティーデザイン分野)、飯倉宏治(情報技術分野)、小田英之(美術分野)、志邨匠子(芸術学分野)、服部浩之(アートマネジメント分野)、萩原健一(映像分野)、藤浩志(美術/アートマネジメント分野)、の共同授業

履修上の注意

テキスト

教員が作成したテキストを適宜配布する。

参考書・参考資料等

授業で適宜紹介する。

学生に対する評価

授業 (プロジェクト) への取り組み 40% 課題の成果 60%

授業科目名	制作技術実習 A 1	担当教員名	石倉敏明、藤浩志、皆川嘉博、山本太郎
授業科目区分	制作技術実習科目		
履修区分	選択	授業形態	実習
配当年次・学期	1 年次通年	単位数	1 単位
授業の到達目標及びテーマ			
<p>学部における「アート&ルーツ専攻」では、文化人類学的な考え方や見方、リサーチに基づく、地域の文化資源・歴史・伝承などの調査と絵画（日本画）、彫刻等の多様な表現領域で新たな表現を試みている。修士課程の1年次に行われる本授業では、学生の研究に求められる専門性の高度化に因るため、自らが作成した研究計画に基づき、制作・研究に関わる高度なスキルを学びながら、複合的な表現や視点を修得することを目標とする。</p>			
授業の概要			
<p>本授業は、学生自身の特別研究のテーマの方向や個々の技量に応じて、それぞれ異なる目的と水準が求められることから、担当教員と学生が研究の深化に必要な技術や知識に関する具体的な協議を行い、その結果を踏まえて授業計画を定めたうえで進められる。その過程では、1年次の履修科目である複合芸術演習や複合芸術実習など中で得られた気づきや経験を踏まえて、各領域を専門とする担当教員のもとで、学生自らがスキルの高度化と拡張に向けた研鑽を行うこととなる。なお、本実習分野の初学者には、科目選択時の面談を介して学生の希望に応じた個別指導を行う環境を整えるなど、制作及び研究の内容を十分理解できるようにするほか、当該学生を担当する研究指導教員が本実習での学びを複合的に研究成果へ転用できるよう特別研究科目の中で助言指導を行うなど、教員間の連携により学修を支援できる体制とする。</p> <p>学生は、研究テーマの方向に基づき、絵画（日本画）、彫刻、立体造形、文化人類学の各分野から一つを選択して履修する。</p>			
授業計画			
<p>第1回～3回 学生自身の特別研究テーマの方向に合わせ、素材や技術を学ぶ計画を担当教員と相談の上作成する。</p> <p>第4回～7回 必要となる素材・手法やスキルの可能性を探る。</p> <p>第8回～11回 必要となる素材・手法やスキルの可能性を試す。</p> <p>第12回～15回 必要となる素材・手法やスキルを習得する。</p> <p>(1コマ×隔週15回)</p> <p>石倉敏明（文化人類学分野）、藤浩志（立体造形分野）、皆川嘉博（彫塑分野）、山本太郎（日本画分野）</p>			
履修上の注意			
自身の研究・制作テーマに向けた目標を定め、自主性を持って取り組むことが求められる。			
テキスト			
教員が作成したテキストを適宜配布する。			
参考書・参考資料等			
必要に応じて適宜個別に指示する。			
学生に対する評価			
実習への取り組み 40% 研究計画に基づく目標の達成度 60%			

授業科目名	制作技術実習 A 2	担当教員名	石倉敏明、藤浩志、皆川嘉博、山本太郎
授業科目区分	制作技術実習科目		
履修区分	選択	授業形態	実習
配当年次・学期	2年次通年	単位数	1単位
授業の到達目標及びテーマ			
<p>学部における「アーツ&ルーツ専攻」は、文化人類学的な考え方や見方、リサーチに基づく、地域の文化資源・歴史・伝承などの調査と絵画（日本画）、彫刻等の多様な表現領域で新たな表現を試みている。修士課程の2年次に行われる本授業では、学生の特別研究に沿った専門性に因るため、1年次の学びを踏まえて自らが作成した研究計画に基づき、制作・研究に関わる高度なスキルを学びながら、複合的な表現の高度化や拡張性を修得することを目標とする。</p>			
授業の概要			
<p>本授業は、学生自身の特別研究のテーマの方向や個々の技量に応じて、それぞれ異なる目的と水準が求められることから、担当教員と学生が研究の深化に必要な技術や知識に関する具体的な協議を行い、その結果を踏まえて授業計画を定めたうえで進められる。その過程では、1年次の学びや2年次の履修科目である複合芸術実習の中で得られた気づきや経験を踏まえて、各領域を専門とする担当教員のもとで、修了研究の完成に向けて、学生自らがスキルの高度化と応用に向けた研鑽を行うこととなる。なお、本学学部の専門分野を基礎に置かない学生には、1年次に引き続き個々に合った指導内容を整えるほか、当該学生が本実習での学びを複合的に研究成果へ転用できるよう研究指導教員が特別研究科目の中で助言指導を行うなど、教員間の連携により学修を支援できる体制とする。</p> <p>学生は、研究テーマに基づき、絵画（日本画）、彫刻、立体造形、文化人類学の各分野から一つを選択して履修する。</p>			
授業計画			
<p>第1回～3回 学生自身の特別研究テーマに沿って、素材や技術を学ぶ計画を担当教員と相談の上作成する。 第4回～7回 必要となる素材・手法やスキルの応用について探求する。 第8回～11回 必要となる素材・手法やスキルの応用について試す。 第12回～15回 必要となる素材・手法やスキルの応用手法を習得する。 (1コマ×隔週15回)</p> <p>石倉敏明（芸術人類学分野）、藤浩志（立体造形分野）、皆川嘉博（彫塑分野）、山本太郎（日本画分野）</p>			
履修上の注意			
自身の研究・制作テーマに沿った目標を定め、自主性を持って取り組むことが求められる。			
テキスト			
教員が作成したテキストを適宜配布する。			
参考書・参考資料等			
必要に応じて適宜個別に指示する。			
学生に対する評価			
実習への取り組み 40% 研究計画に基づく目標の達成度 60%			

授業科目名	制作技術実習 B 1	担当教員名	阿部由布子、岩井成昭、大谷有花、 小田英之、高嶺格、長沢桂一
授業科目区分	制作技術実習科目		
履修区分	選択	授業形態	実習
配当年次・学期	1年次通年	単位数	1単位
授業の到達目標及びテーマ			
<p>学部における「ビジュアルアート専攻」では、現代における世界の問題と個人を取り巻く様々な環境を今日の視点で捉え、その表現の根拠を示し、多様な表現領域を融合することで、既存の枠で捉えられない多様な表現を試みている。修士課程の1年次に行われる本授業では、学生の研究に求められる専門性の高度化に応えるため、自らが作成した研究計画に基づき、制作・研究に関わる高度なスキルを学びながら、複合的な表現や視点を修得することを目標とする。</p>			
授業の概要			
<p>本授業は、学生自身の特別研究のテーマの方向や個々の技量に応じて、それぞれ異なる目的と水準が求められることから、担当教員と学生が研究の深化に必要な技術や知識に関する具体的な協議を行い、その結果を踏まえて授業計画を定めたうえで進められる。その過程では、1年次の履修科目である複合芸術演習や複合芸術実習などで得られた気づきや経験を踏まえて、各領域を専門とする担当教員のもとで、学生自らがスキルの高度化と拡張に向けた研鑽を行うこととなる。なお、本実習分野の初学者には、科目選択時の面談を介して学生の希望に応じた個別指導を行う環境を整えるなど、制作及び研究の内容を十分理解できるようにするほか、当該学生を担当する研究指導教員が本実習での学びを複合的に研究成果へ転用できるよう特別研究科目の中で助言指導を行うなど、教員間の連携により学修を支援できる体制とする。</p> <p>学生は、研究テーマの方向に基づき、絵画、彫刻、テキスタイル、パフォーマンス、インスタレーション、メディアアート、イラストレーションの各分野から一つを選択して履修する。</p>			
授業計画			
<p>第1回～3回 学生自身の特別研究テーマの方向に合わせ、素材や技術を学ぶ計画を担当教員と相談の上作成する。</p> <p>第4回～7回 必要となる素材・手法やスキルの可能性を探る。</p> <p>第8回～11回 必要となる素材・手法やスキルの可能性を試す。</p> <p>第12回～15回 必要となる素材・手法やスキルを習得する。</p> <p>(1コマ×隔週15回)</p> <p>阿部由布子(メディア・アート分野)、岩井成昭(インスタレーション分野)、大谷有花(現代絵画分野)、小田英之(絵画/イラストレーション分野)、高嶺格(パフォーマンス分野)、長沢桂一(テキスタイル分野)</p>			
履修上の注意			
自身の研究・制作テーマに向けた目標を定め、自主性を持って取り組むことが求められる。			
テキスト			
教員が作成したテキストを適宜配布する。			
参考書・参考資料等			
必要に応じて適宜個別に指示する。			
学生に対する評価			
実習への取り組み 40% 研究計画に基づく目標の達成度 60%			

授業科目名	制作技術実習 B 2	担当教員名	阿部由布子、岩井成昭、大谷有花、 小田英之、高嶺格、長沢桂一
授業科目区分	制作技術実習科目		
履修区分	選択	授業形態	実習
配当年次・学期	2 年次通年	単位数	1 単位
授業の到達目標及びテーマ			
<p>学部における「ビジュアルアート専攻」は、現代における世界の問題と個人を取り巻く様々な環境を今日の視点で捉え、その表現の根拠を示し、多様な表現領域を融合することで、既存の枠で捉えられない多様な表現を試みている。修士課程の2年次に行われる本授業では、学生の特別研究に沿った専門性に応えるため、1年次の学びを踏まえて自らが作成した研究計画に基づき、制作・研究に関わる高度なスキルを学びながら、複合的な表現の高度化や拡張性を修得することを目標とする。</p>			
授業の概要			
<p>本授業は、学生自身の特別研究のテーマの方向や個々の技量に応じて、それぞれ異なる目的と水準が求められることから、担当教員と学生が研究の深化に必要な技術や知識に関する具体的な協議を行い、その結果を踏まえて授業計画を定めたうえで進められる。その過程では、1年次の学びや2年次の履修科目である複合芸術実習の中で得られた気づきや経験を踏まえて、各領域を専門とする担当教員のもとで、修了研究の完成に向けて、学生自らがスキルの高度化と応用に向けた研鑽を行うこととなる。なお、本学学部の専門分野を基礎に置かない学生には、1年次に引き続き個々に合った指導内容を整えるほか、当該学生が本実習での学びを複合的に研究成果へ転用できるよう研究指導教員が特別研究科目の中で助言指導を行うなど、教員間の連携により学修を支援できる体制とする。</p> <p>学生は、研究テーマに基づき、絵画、彫刻、テキスタイル、パフォーマンス、インスタレーション、メディアアート、イラストレーションの各分野から一つを選択して履修する。</p>			
授業計画			
<p>第1回～3回 学生自身の特別研究テーマに沿って、素材や技術を学ぶ計画を担当教員と相談の上作成する。 第4回～7回 必要となる素材・手法やスキルの応用について探求する。 第8回～11回 必要となる素材・手法やスキルの応用について試す。 第12回～15回 必要となる素材・手法やスキルの応用手法を習得する。 (1コマ×隔週15回)</p> <p>阿部由布子（メディア・アート分野）、岩井成昭（インスタレーション分野）、大谷有花（現代絵画分野）、小田英之（絵画／イラストレーション分野）、高嶺格（パフォーマンス分野）、長沢桂一（テキスタイル分野）</p>			
履修上の注意			
自身の研究・制作テーマに沿った目標を定め、自主性を持って取り組むことが求められる。			
テキスト			
教員が作成したテキストを適宜配布する。			
参考書・参考資料等			
必要に応じて適宜個別に指示する。			
学生に対する評価			
実習への取り組み 40% 研究計画に基づく目標の達成度 60%			

授業科目名	制作技術実習 C 1	担当教員名	安藤郁子、安藤康裕、今中隆介、熊谷晃、小牟禮尊人、森香織、山岡惇
授業科目区分	制作技術実習科目		
履修区分	選択	授業形態	実習
配当年次・学期	1 年次通年	単位数	1 単位
授業の到達目標及びテーマ 学部における「ものづくりデザイン専攻」は、「使用感の充足」をテーマに従来の近代工業思想による均質化されたものづくりから脱却し、プロダクトデザインの思想と木工、金属、漆、染色、陶磁、ガラスといった素材の特性と表現技法を通じて地域文化の掘り起こしと再解釈を試みている。修士課程の1年次に行われる本授業では、学生の研究に求められる専門性の高度化に 대응するため、自らが作成した研究計画に基づき、制作・研究に関わる高度なスキルを学びながら、複合的な表現や視点を修得することを目標とする。			
授業の概要 本授業は、学生自身の特別研究のテーマの方向や個々の技量に応じて、それぞれ異なる目的と水準が求められることから、担当教員と学生が研究の深化に必要な技術や知識に関する具体的な協議を行い、その結果を踏まえて授業計画を定めたうえで進められる。その過程では、1年次の履修科目である複合芸術演習や複合芸術実習などで得られた気づきや経験を踏まえて、各領域を専門とする担当教員のもとで、学生自らがスキルの高度化と拡張に向けた研鑽を行うこととなる。なお、本実習分野の初学者には、科目選択時の面談を介して学生の希望に応じた個別指導を行う環境を整えるなど、制作及び研究の内容を十分理解できるようにするほか、当該学生を担当する研究指導教員が本実習での学びを複合的に研究成果へ転用できるよう特別研究科目の中で助言指導を行うなど、教員間の連携により学修を支援できる体制とする。 学生は、研究テーマの方向に基づき、木工、彫金、漆、染色、陶磁、ガラス、プロダクトデザインの各分野から一つを選択して履修する。			
授業計画 第1回～3回 学生自身の特別研究テーマの方向に合わせ、素材や技術を学ぶ計画を担当教員と相談の上作成する。 第4回～7回 必要となる素材・手法やスキルの可能性を探る。 第8回～11回 必要となる素材・手法やスキルの可能性を試す。 第12回～15回 必要となる素材・手法やスキルの可能性を習得する。 (1コマ×隔週15回) 安藤郁子(陶芸分野)、安藤康裕(彫金分野)、今中隆介(プロダクトデザイン分野)、熊谷晃(漆分野)、小牟禮尊人(ガラス分野)、森香織(染分野)、山岡惇(木工分野)			
履修上の注意 自身の研究・制作テーマに向けた目標を定め、自主性を持って取り組むことが求められる。			
テキスト 教員が作成したテキストを適宜配布する。			
参考書・参考資料等 必要に応じて適宜個別に指示する。			
学生に対する評価 実習への取り組み 40% 研究計画に基づく目標の達成度 60%			

授業科目名	制作技術実習C2	担当教員名	安藤郁子、安藤康裕、今中隆介、熊谷晃、小牟禮尊人、森香織、山岡惇
授業科目区分	制作技術実習科目		
履修区分	選択	授業形態	実習
配当年次・学期	2年次通年	単位数	1単位
授業の到達目標及びテーマ 学部における「ものづくりデザイン専攻」は、「使用感の充足」をテーマに従来の近代工業思想による均質化されたものづくりから脱却し、プロダクトデザインの思想と木工、金属、漆、染色、陶磁、ガラスといった素材の特性と表現技法を通じて地域文化の掘り起こしと再解釈を試みている。修士課程の2年次に行われる本授業では、学生の特別研究に沿った専門性に因るため、1年次の学びを踏まえて自らが作成した研究計画に基づき、制作・研究に関わる高度なスキルを学びながら、複合的な表現の高度化や拡張性を修得することを目標とする。			
授業の概要 本授業は、学生自身の特別研究のテーマの方向や個々の技量に応じて、それぞれ異なる目的と水準が求められることから、担当教員と学生が研究の深化に必要な技術や知識に関する具体的な協議を行い、その結果を踏まえて授業計画を定めたうえで進められる。その過程では、1年次の学びや2年次の履修科目である複合芸術実習の中で得られた気づきや経験を踏まえて、各領域を専門とする担当教員のもとで、修了研究の完成に向けて、学生自らがスキルの高度化と応用に向けた研鑽を行うこととなる。なお、本学学部の専門分野を基礎に置かない学生には、1年次に引き続き個々に合った指導内容を整えるほか、当該学生が本実習での学びを複合的に研究成果へ転用できるよう研究指導教員が特別研究科目の中で助言指導を行うなど、教員間の連携により学修を支援できる体制とする。 学生は、木工、彫金、漆、染色、陶磁、ガラス、プロダクトデザインの各分野から一つを選択して履修する。			
授業計画 第1回～3回 学生自身の特別研究テーマに沿って、素材や技術を学ぶ計画を担当教員と相談の上作成する。 第4回～7回 必要となる素材・手法やスキルの応用について探求する。 第8回～11回 必要となる素材・手法やスキルの応用について試す。 第12回～15回 必要となる素材・手法やスキルの応用手法を習得する。 (1コマ×隔週15回) 安藤郁子(陶芸分野)、安藤康裕(彫金分野)、今中隆介(プロダクトデザイン分野)、熊谷晃(漆分野)、小牟禮尊人(ガラス分野)、森香織(染分野)、山岡惇(木工分野)			
履修上の注意 自身の研究・制作テーマに沿った目標を定め、自主性を持って取り組むことが求められる。			
テキスト 教員が作成したテキストを適宜配布する。			
参考書・参考資料等 必要に応じて適宜個別に指示する。			
学生に対する評価 実習への取り組み 40% 研究計画に基づく目標の達成度 60%			

授業科目名	制作技術実習D 1	担当教員名	官能右泰、金孝卿、孔鎮烈、 坂本憲信、裴鎮奭、水田圭
授業科目区分	制作技術実習科目		
履修区分	選択	授業形態	実習
配当年次・学期	1年次通年	単位数	1単位
授業の到達目標及びテーマ			
<p>学部における「コミュニケーションデザイン専攻」は、コミュニケーションに内在する今日的な課題に取り組むための思考と表現について、グラフィックデザインの立場から研究し、幅広い観点から現代社会のあるべき姿の探求を試みている。修士課程の1年次に行われる本授業では、学生の研究に求められる専門性の高度化に 대응するため、自らが作成した研究計画に基づき、制作・研究に関わる高度なスキルを学びながら、複合的な表現や視点を修得することを目標とする。</p>			
授業の概要			
<p>本授業は、学生自身の特別研究のテーマの方向や個々の技量に応じて、それぞれ異なる目的と水準が求められることから、担当教員と学生が研究の深化に必要な技術や知識に関する具体的な協議を行い、その結果を踏まえて授業計画を定めたうえで進められる。その過程では、1年次の履修科目である複合芸術演習や複合芸術実習などで得られた気づきや経験を踏まえて、各領域を専門とする担当教員のもとで、学生自らがスキルの高度化と拡張に向けた研鑽を行うこととなる。なお、本実習分野の初学者には、科目選択時の面談を介して学生の希望に応じた個別指導を行う環境を整えるなど、制作及び研究の内容を十分理解できるようにするほか、当該学生を担当する研究指導教員が本実習での学びを複合的に研究成果へ転用できるよう特別研究科目の中で助言指導を行うなど、教員間の連携により学修を支援できる体制とする。</p> <p>学生は、研究テーマの方向に基づき、タイポグラフィ、パッケージ、ポスター、エディトリアルデザイン、ウェブデザインの各分野から一つを選択して履修する。</p>			
授業計画			
<p>第1回～3回 学生自身の特別研究テーマの方向に合わせ、素材や技術を学ぶ計画を担当教員と相談の上作成する。</p> <p>第4回～7回 必要となる素材・手法やスキルの可能性を探る。</p> <p>第8回～11回 必要となる素材・手法やスキルの可能性を試す。</p> <p>第12回～15回 必要となる素材・手法やスキルを習得する。</p> <p>(1コマ×隔週15回)</p> <p>官能右泰(タイポグラフィデザイン)、金孝卿(色彩構成)、孔鎮烈(パッケージデザイン) 坂本憲信(ポスターデザイン)、裴鎮奭(Webデザイン)、水田圭(エディトリアルデザイン)</p>			
履修上の注意			
自身の研究・制作テーマに沿った目標を定め、自主性を持って取り組むことが求められる。			
テキスト			
教員が作成したテキストを適宜配布する。			
参考書・参考資料等			
必要に応じて適宜個別に指示する。			
学生に対する評価			
実習への取り組み 40% 研究計画に基づく目標の達成度 60%			

授業科目名	制作技術実習D 2	担当教員名	官能右泰、金孝卿、孔鎮烈、 坂本憲信、裴鎮奭、水田圭
授業科目区分	制作技術実習科目		
履修区分	選択	授業形態	実習
配当年次・学期	2年次通年	単位数	1単位
授業の到達目標及びテーマ			
<p>学部における「コミュニケーションデザイン専攻」は、コミュニケーションに内在する今日的な課題に取り組むための思考と表現について、グラフィックデザインの立場から研究し、幅広い観点から現代社会のあるべき姿の探求を試みている。修士課程の2年次に行われる本授業では、学生の特別研究に沿った専門性に応えるため、1年次の学びを踏まえて自らが作成した研究計画に基づき、制作・研究に関わる高度なスキルを学びながら、複合的な表現の高度化や拡張性を修得することを目標とする。</p>			
授業の概要			
<p>本授業は、学生自身の特別研究のテーマの方向や個々の技量に応じて、それぞれ異なる目的と水準が求められることから、担当教員と学生が研究の深化に必要な技術や知識に関する具体的な協議を行い、その結果を踏まえて授業計画を定めたうえで進められる。その過程では、1年次の学びや2年次の履修科目である複合芸術実習の中で得られた気づきや経験を踏まえて、各領域を専門とする担当教員のもとで、修了研究の完成に向けて、学生自らがスキルの高度化と応用に向けた研鑽を行うこととなる。なお、本学学部の専門分野を基礎に置かない学生には、1年次に引き続き個々に合った指導内容を整えるほか、当該学生が本実習での学びを複合的に研究成果へ転用できるよう研究指導教員が特別研究科目の中で助言指導を行うなど、教員間の連携により学修を支援できる体制とする。</p> <p>学生は、研究テーマに基づき、タイポグラフィ、パッケージ、ポスター、エディトリアルデザイン、ウェブデザインの各分野から一つを選択して履修する。</p>			
授業計画			
<p>第1回～3回 学生自身の特別研究テーマに沿って、素材や技術を学ぶ計画を担当教員と相談の上作成する。 第4回～7回 必要となる素材・手法やスキルの応用について探求する。 第8回～11回 必要となる素材・手法やスキルの応用について試す。 第12回～15回 必要となる素材・手法やスキルの応用手法を習得する。 (1コマ×隔週15回)</p> <p>官能右泰(タイポグラフィデザイン)、金孝卿(色彩構成)、孔鎮烈(パッケージデザイン) 坂本憲信(ポスターデザイン)、裴鎮奭(Webデザイン)、水田圭(エディトリアルデザイン)</p>			
履修上の注意			
自身の研究・制作テーマに沿った目標を定め、自主性を持って取り組むことが求められる。			
テキスト			
教員が作成したテキストを適宜配布する。			
参考書・参考資料等			
必要に応じて適宜個別に指示する。			
学生に対する評価			
実習への取り組み 40% 研究計画に基づく目標の達成度 60%			

授業科目名	制作技術演習 E 1	担当教員名	小杉栄次郎、菅原香織、山内貴博
授業科目区分	制作技術実習科目		
履修区分	選択	授業形態	実習
配当年次・学期	1年次通年	単位数	1単位
授業の到達目標及びテーマ			
<p>学部における「景観デザイン専攻」はまちづくりに必要な、都市、ランドスケープ、プロダクト、建築、商品開発といった異なるスケールの視点によって「景観」を捉え、まちづくりにおける課題とその解決策を模索している。修士課程の1年次に行われる本授業では、学生の研究に求められる専門性の高度化に応えるため、自らが作成した研究計画に基づき、制作・研究に関わる高度なスキルを学びながら、複合的な表現や視点を修得することを目標とする。</p>			
授業の概要			
<p>本授業は、学生自身の特別研究のテーマの方向や個々の技量に応じて、それぞれ異なる目的と水準が求められることから、担当教員と学生が研究の深化に必要な技術や知識に関する具体的な協議を行い、その結果を踏まえて授業計画を定めたうえで進められる。その過程では、1年次の履修科目である複合芸術演習や複合芸術実習などで得られた気づきや経験を踏まえて、各領域を専門とする担当教員のもとで、学生自らがスキルの高度化と拡張に向けた研鑽を行うこととなる。なお、本実習分野の初学者には、科目選択時の面談を介して学生の希望に応じた個別指導を行う環境を整えるなど、制作及び研究の内容を十分理解できるようにするほか、当該学生を担当する研究指導教員が本実習での学びを複合的に研究成果へ転用できるよう特別研究科目の中で助言指導を行うなど、教員間の連携により学修を支援できる体制とする。</p> <p>学生は、研究テーマの方向に基づき、ランドスケープデザインや建築設計、生活空間のデザインの各分野から一つを選択して履修する。</p>			
授業計画			
<p>第1回～3回 学生自身の特別研究テーマの方向に合わせ、素材や技術を学ぶ計画を担当教員と相談の上作成する。</p> <p>第4回～7回 必要となる素材・手法やスキルの可能性を探る。</p> <p>第8回～11回 必要となる素材・手法やスキルの可能性を試す。</p> <p>第12回～15回 必要となる素材・手法やスキルを習得する。</p> <p>(1コマ×隔週15回)</p> <p>小杉栄次郎（建築分野）、菅原香織（公共デザイン分野）、山内貴博（環境デザイン分野）</p>			
履修上の注意			
自身の研究・制作テーマに向けた目標を定め、自主性を持って取り組むことが求められる。			
テキスト			
教員が作成したテキストを適宜配布する。			
参考書・参考資料等			
必要に応じて適宜個別に指示する。			
学生に対する評価			
実習への取り組み 40% 研究計画に基づく目標の達成度 60%			

授業科目名	制作技術演習 E2	担当教員名	小杉栄次郎、菅原香織、山内貴博
授業科目区分	制作技術実習科目		
履修区分	選択	授業形態	実習
配当年次・学期	2年次通年	単位数	1単位
授業の到達目標及びテーマ 学部における「景観デザイン」はまちづくりに必要な、都市、ランドスケープ、プロダクト、建築、商品開発といった異なるスケールの視点によって「景観」をとらえ、まちづくりにおける課題とその解決策を模索している。修士課程の2年次に行われる本授業では、学生の特別研究に沿った専門性に応えるため、1年次の学びを踏まえて自らが作成した研究計画に基づき、制作・研究に関わる高度なスキルを学びながら、複合的な表現の高度化や拡張性を修得することを目標とする。			
授業の概要 本授業は、学生自身の特別研究のテーマの方向や個々の技量に応じて、それぞれ異なる目的と水準が求められることから、担当教員と学生が研究の深化に必要な技術や知識に関する具体的な協議を行い、その結果を踏まえて授業計画を定めたうえで進められる。その過程では、1年次の学びや2年次の履修科目である複合芸術実習の中で得られた気づきや経験を踏まえて、各領域を専門とする担当教員のもとで、修了研究の完成に向けて、学生自らがスキルの高度化と応用に向けた研鑽を行うこととなる。なお、本学学部の専門分野を基礎に置かない学生には、1年次に引き続き個々に合った指導内容を整えるほか、当該学生が本実習での学びを複合的に研究成果へ転用できるよう研究指導教員が特別研究科目の中で助言指導を行うなど、教員間の連携により学修を支援できる体制とする。 学生は、研究テーマに基づき、ランドスケープデザイン、建築設計、生活空間のデザイン各分野から一つを選択して履修する。			
授業計画 第1回～3回 学生自身の特別研究テーマに沿って、素材や技術を学ぶ計画を担当教員と相談の上作成する。 第4回～7回 必要となる素材・手法やスキルの応用について探求する。 第8回～11回 必要となる素材・手法やスキルの応用について試す。 第12回～15回 必要となる素材・手法やスキルの応用手法を習得する。 (1コマ×隔週15回) 小杉栄次郎(建築分野)、菅原香織(公共デザイン分野)、山内貴博(環境デザイン分野)			
履修上の注意 自身の研究・制作テーマに沿った目標を定め、自主性を持って取り組むことが求められる。			
テキスト 教員が作成したテキストを適宜配布する。			
参考書・参考資料等 必要に応じて適宜個別に指示する。			
学生に対する評価 実習への取り組み 40% 研究計画に基づく目標の達成度 60%			

授業科目名	特別研究 I	担当教員名	尾登誠一、小田英之、藤浩志、岩井成昭、今中隆介、志邨匠子、岸健太、飯倉宏治、服部浩之、萩原健一
授業科目区分	特別研究科目		
履修区分	必修	授業形態	演習
配当年次・学期	1 年次通年	単位数	2 単位
授業の到達目標及びテーマ			
<p>本授業では、修士論文及び修士制作に関する指導を面談形式で行いながら、研究テーマの発表、年次制作・研究の発表及び報告書の提出という流れを通じて、修士論文または修士制作に繋げる研究テーマ設定と、そのテーマに基づく制作・研究を行う中で新たな試みや修正を加え、複合的視点に立脚した一定の成果を得るとともに、研究の方向を定めることを目標とする。</p>			
授業の概要			
<p>本授業は、研究テーマ発表、年次制作・研究発表、報告書の提出という段階から構成され、修了研究・修了制作を行う 2 年次の特別研究 II に向けた準備段階と位置づけられる。</p> <p>1 年次前期には、入学時に提出された研究計画に基づき担当教員を配置し、その教員が、学生の研究テーマに関連する教員と連携しながら「研究テーマの発表」に向けた指導を行う。</p> <p>「研究テーマ発表」を終えた後期は、総合芸術実習 I、II における成果等を踏まえて、研究テーマの内容に基づいた研究指導教員と関連分野の副指導教員が指導に当たる。学生は両指導教員と定期的に研究・制作のテーマや意図、内容や手法に関する相談と進捗状況の報告をしながら、年次制作・研究を完了し、発表を行ったうえで報告書を提出する。</p>			
授業計画			
<p>第 1 回 ガイダンス・担当教員の配置</p> <p>第 2 回～ 3 回 研究計画書に基づき仮担当教員を決定し、個別面談（計画書の確認、授業プランの作成、研究テーマの検討）を行う。</p> <p>第 4 回～ 6 回 研究テーマ発表準備</p> <p>第 7 回～ 9 回 研究テーマ発表、指導教員決定</p> <p>第 10 回～13 回 研究テーマに基づく個別指導、定期的に進捗報告。年次制作の準備</p> <p>第 14 回～15 回 年次制作・研究発表 報告書提出 修士研究構想発表準備</p> <p>研究指導教員の研究テーマは次のとおりである。</p> <p>（尾登 誠一）機能デザインをベースとした総合的なデザイン論を踏まえて、プロジェクトを企画・立案し、外部組織との連携等を通じて、ソーシャルデザインの成果につなげるための研究指導を行う。</p> <p>（小田 英之）ビジュアルデザインの視点から社会問題を捉え、絵画やイラストレーション、CG をベースとしたグラフィックデザインなどのメディアを効果的に活用した課題解決に関する研究指導を行う。</p> <p>（藤 浩志）立体造形やコミュニティアートなどの表現手法と、文化イベントやアートプロジェ</p>			

<p>クトの実践を踏まえて、対象に応じた表現活動や組織形態、資金計画、広報等、社会と深く接合するアートマネジメントに関する研究指導を行う。</p> <p>(岩井 成昭) 現代芸術におけるリレーショナル・アートやソーシャリー・エンゲージド・アートなど、社会や地域に多様な価値をもたらすプロジェクト型アートとその効果的な立ち上げに必要なリサーチ及びワークショップの実際に関する研究指導を行う。</p> <p>(今中 隆介) 流通を意識したプロダクトデザインやものづくりの知見と、社会を俯瞰するデザイン思考に基づいて、対象とする相手方に応じた制作・提案やプロジェクト運営に必要な体制の組成・実践に関する研究指導を行う。</p> <p>(志邨 匠子) 刻々と変化している現代芸術を、美術史研究の視点から考察するとともに、本学の「複合芸術」を対象とする多様な試みを課題として取り上げ、その成果検証と理論形成に関わる研究指導を行う。</p> <p>(岸 健太) 建築及び都市デザインの視点から、地域や企業を含むコミュニティを対象として、地域課題の解決を試みるプロジェクトの具体化に必要なサーベイ手法、多様な組織との交渉、マネジメントなどに関する研究指導を行う。</p> <p>(飯倉 宏治) 情報技術の高度利用を通じて、プロジェクトにおける具体的な制作・提案を行う際に必要となるファブリケーションやメディアアートなど、ITと芸術の複合による効果的な活用に関する研究指導を行う。</p> <p>(萩原 健一) 対象物や対象地域に応じた映像表現の複合的な活用を通じて、メディアによる地域・人・事柄をつなぐ可能性を探究し、従来とは異なる地域課題の解決手法や表現領域の拡張に関する研究指導を行う。</p> <p>(服部 浩之) キュレーターとして文化施設や芸術祭の立ち上げ及び運営の知見を基に、社会に深く関与するプロジェクトの企画や、アートマネジメント手法を用いた運営及び記録・アーカイヴ、評価など、プロジェクトの実践に関する研究指導を行う。</p>
<p>履修上の注意</p> <p>全体で行う発表などの他は、原則個人指導で行うため、担当教員（前期のみ、研究領域の確定まで）、主・副指導教員（研究テーマ発表以後）とよく相談し授業計画を立てること。</p>
<p>テキスト</p> <p>授業内で適宜紹介する。</p>
<p>参考書・参考資料等</p> <p>授業内で適宜紹介する</p>
<p>学生に対する評価</p> <p>個人指導での評価、研究制作や研究発表など、総合的に判断する。</p>

授業科目名	特別研究Ⅱ	担当教員名	尾登誠一、小田英之、藤浩志、岩井成昭、今中隆介、志邨匠子、岸健太、飯倉宏治、服部浩之、萩原健一
授業科目区分	特別研究科目		
履修区分	必修	授業形態	演習
配当年次・学期	2年次通年	単位数	4単位

授業の到達目標及びテーマ

本授業では、修士論文及び修士制作に関する指導を面談形式で行いながら、研究指導を担当する主指導教員が副指導教員との複数体制で学生の研究・制作の指導に当たる。

特別研究Ⅰ（1年次）の中で定めた研究テーマや、取り組んだ年次制作・研究発表、提出した報告書を踏まえて、本授業では、修士研究の構想発表、中間報告・発表、修士論文・修士制作の提出、公開発表会という流れの中で、自らの研究・制作をより発展・深化させ、複合的視点から既存の領域や価値観にとらわれない研究成果として、修士論文または修士制作として結実することを目標とする。

授業の概要

2年次の本授業では、修士研究構想発表、中間報告を経て、中間発表、修了制作・論文審査をおこなう。前期は修士研究構想発表を行い、研究・制作のテーマを確定し、修了制作、および修士論文のいずれかで審査を受けるか確定する。中間報告後は後期の中間発表を経て、公開での修了制作・研究審査ののち、修了制作及び論文発表会をおこなう。指導は研究テーマの内容に基づいた指導教員1名と関連分野の副指導教員1名が当たる。履修者は各指導教員と定期的に研究・制作のテーマ、意図及び内容・手法について相談し進捗報告をおこないながら、複合芸術実習等でより精度の高い研究や制作を繰り返し、その成果をもって修了制作・研究の審査・発表に望む。

授業計画

- 第1回～6回 修士研究構想発表準備
- 第7回～8回 修士研究構想発表（修士研究・制作の内容確定）
- 第9回～12回 中間報告準備
- 第13回～19回 中間報告
- 第20回～21回 中間発表準備（修士論文・修了制作）
- 第22回～24回 中間発表
- 第25回～28回 制作及び執筆の進捗チェック（修士論文・修了制作）
- 第29回～30回 修士論文、修士制作の提出及び審査

（2月下旬 修士論文・修士制作の公開発表会）

研究指導教員の研究テーマは次のとおりである。

（尾登 誠一）機能デザインをベースとした総合的なデザイン論を踏まえて、プロジェクトを企画・立案し、外部組織との連携等を通じて、ソーシャルデザインの成果につなげるための研究指導を行う。

<p>(小田 英之) ビジュアルデザインの視点から社会問題を捉え、絵画やイラストレーション、CGをベースとしたグラフィックデザインなどのメディアを効果的に活用した課題解決に関する研究指導を行う。</p> <p>(藤 浩志) 立体造形やコミュニティアートなどの表現手法と、文化イベントやアートプロジェクトの実践を踏まえて、対象に応じた表現活動や組織形態、資金計画、広報等、社会と深く接合するアートマネジメントに関する研究指導を行う。</p> <p>(岩井 成昭) 現代芸術におけるリレーショナル・アートやソーシャリー・エンゲージド・アートなど、社会や地域に多様な価値をもたらすプロジェクト型アートとその効果的な立ち上げに必要なリサーチ及びワークショップの実際に関する研究指導を行う。</p> <p>(今中 隆介) 流通を意識したプロダクトデザインやものづくりの知見と、社会を俯瞰するデザイン思考に基づいて、対象とする相手方に応じた制作・提案やプロジェクト運営に必要な体制の組成・実践に関する研究指導を行う。</p> <p>(志邨 匠子) 刻々と変化している現代芸術を、美術史研究の視点から考察するとともに、本学の「複合芸術」を対象とする多様な試みを課題として取り上げ、その成果検証と理論形成に関わる研究指導を行う。</p> <p>(岸 健太) 建築及び都市デザインの視点から、地域や企業を含むコミュニティを対象として、地域課題の解決を試みるプロジェクトの具体化に必要なサーベイ手法、多様な組織との交渉、マネジメントなどに関する研究指導を行う。</p> <p>(飯倉 宏治) 情報技術の高度利用を通じて、プロジェクトにおける具体的な制作・提案を行う際に必要となるファブリケーションやメディアアートなど、ITと芸術の複合による効果的な活用に関する研究指導を行う。</p> <p>(萩原 健一) 対象物や対象地域に応じた映像表現の複合的な活用を通じて、メディアによる地域・人・事柄をつなぐ可能性を探究し、従来とは異なる地域課題の解決手法や表現領域の拡張に関する研究指導を行う。</p> <p>(服部 浩之) キュレーターとして文化施設や芸術祭の立ち上げ及び運営の知見を基に、社会に深く関与するプロジェクトの企画や、アートマネジメント手法を用いた運営及び記録・アーカイブ、評価など、プロジェクトの実践に関する研究指導を行う。</p>
<p>履修上の注意</p> <p>全体で行う発表などの他は、原則個人指導で行うため、担当教員（前期のみ、研究領域の確定まで）、主・副指導教員（研究テーマ発表以後）とよく相談し授業計画を立てること。</p>
<p>テキスト</p> <p>授業内で適宜紹介する。</p>
<p>参考書・参考資料等</p> <p>授業内で適宜紹介する</p>
<p>学生に対する評価</p> <p>個人指導での評価、研究制作や研究発表、審査結果など、総合的に判断する。</p>